埼玉工大紀要
No. 4 (1986)

J. Harris の言語哲学

——記号をめぐる思想 I ——

広 瀬 友 久

序

17・18世紀のヨーロッパに於ける言語哲学の展開，中でも言葉・観念・事物の関係に関する諸考察は，同時代の言語意識の様々な襞を知るためのみならず，広く近代的思考の枠組を考へるうへで，多くの示唆を与へてくれるものと思はれる。それ故にまた，それらを辿ってみることが，ソシュール以後の記号をめぐる諸思想のあり方を際立たせてくれることにもなると思はれるのである。

James Harris (1709—1780) の主著である "Hermes: or A Philosophical Inquiry Concerning Language and Universal Grammar, 1751" は，同時代の関連分野の諸著作への言及が全く無く，もっぱら古典からの引用で埋め尽されてゐる奇書であるが，そこに於ける言語の本質をめぐる哲学的考察は，やはり言葉と観念の問題に対して集中的になされてゐるのであり，以下の論考も品詞論の細かい点には立ち入らず，本質論的な部分に焦点を合はせつつ進めてゆきたいと考へる。このやうな場合，論点を明確にしてゆくために有効な方法としては，説の展開を追ってゆく際に，そこで何が実体とみなされてゐるか，そしてその実体化に於て何がア・プリオリとされて前提となってゐるかを，常に意識的に読みとってゆくといふことが考へられる。そのやうな読みに於てこそ，言説の背後にある様々な層が浮かび出てくると思はれるからである。テキストには，オルムスの復刻版と南雲堂の翻刻版を用いた。以下の論で，文末の括弧の中に示された数字は，原著に於てそれに相当する主張がなされてゐるページをさしてゐる。

ハリスは "Hermes" の巻頭の大法官への献辞に於て，この書の目的は言語の諸力 (the powers of speech) の原理の探究である，と述べてゐ

る(iii)。そしてさらに，第1部第I章となってゐる序説（全体の構想）に於て，言語は私達のもってゐる最良にして最も高貴なる能力すなはち理性と社会性の結合エネルギー (joint energie) であるとしてゐる (p. 2)。この power や energie といった言葉から，ハリスの言語の把へ方の基本的性格を読みとることができる。それは，言語を事物との対応や感覚的要素への還元などによって根拠づけることをせず，また現象面のみを法則的に把握するといふ近代科学の方法にも従ふこともせず，あくまで言語の本質理解を，言語活動の究極的な諸原因・諸力との関係に於て行なってゆくことを目指すといふことであると考へられる。従って言語の分析といふことも，そのやうな線に沿って行なはれることになるであらう。第1部第II章で，文の性格を論じつつ，ハリスは，発話 (speech) とは話者の精神のエネルギーの表出 (publishing) である，としてゐる (p. 15)。かくして言語は精神のエネルギーに帰せられることになるが，それは単なる活動といふよりは背後に精神独自の形式（形相）が存在することを暗示してゐる。

言語の分析

言語の探究には分析と総合があるとしたうへで，ハリスは，言語の分析は次の二つの方向で行なはれるとする。その一つは，言語をその構成要素に分解することであり，もう一つは言語を質料 (matter) と形相 (form) に分けて把握することである。このやうな言語の分析は，言語の根底にある普遍的な形式そして力に到達せんとする試みといへるわけであり，ハリスはそれを哲学的文法ないしは普遍文法と呼んでゐる (p. 2)。そして "Hermes" に於ける探究を分析に限定し，総合は論理学や修辞学や詩作の領域としてゐるわけである (p. 3～7)。

さてハリスは，言語をその構成要素へと分解してゆく際に，人間の認識の順序に従ふならば，まづ文がとり出されるとする (p. 12)。それは恐らく，文のレヴェルに於て，人間の精神のエネルギーの表出が明瞭に現はれることを，まづ認めたからであらう。実際ハリスは，人間の精神の主要な power を認識 (perception, 感覚と知性) と情意 (volition) であるとしたうへで，文をその表出してゐる power に従って分類してゐるわけである。感覚によるものであれ知性によるものであれ何らかの認識を表出してゐる文は主張 (assertion) の文とされ，いはゆる疑問文・命令文・祈願文などは情意の文とされるのである (p. 15～17)。

言語表現の拡がりは無限であるのに対し，文法が扱ふ最大限は文である，としたうへでハリスはさらに文を分解して言語の最小部分へと到達しようとする。それはその最小部分に，普遍的な基本的要素が発見できると考へるからであるが，その際，まづ文は「それ自身意味をもち，それを部分に分けてもその部分がまたそれ自体で意味をもつやうな，音の複合体」と表現される。ここで意味と音といふ新たなカテゴリーが導入されたわけであるが，それにより，「それを分けた場合，もはやその部分がそれ自体では意味をもち得ないやうな，有意味な音」の存在が認められることとなり，それが言語の最小部分である語 (word) としてとり出されることになるわけである (p. 19～21)。この意味と音とは，ここでは無条件に導入されてゐる。それは，後にこの両者が言語の質料と形相として把握されるところでもわかるやうに，この両者の表象は，いはば言語の外に，先立って既に成立してゐるものと想定されてゐるからであると思はれる。この想定は，精神の活動を先行させ，それに言語を結びつけるといふハリスの基本的立場には当然のものとなってゐるといへるのである。

とにかくいったん前提となった意味は，語の分類に於ても根本的な役割を果すこととなる。文を分解してとり出された語の中には，それ自体でつまり絶対的に意味をもつものと，他の語との関係に於てのみつまり相対的に意味をもつものとがあるとされ，前者が主要語 (principals) であり，後者が付加語 (accessories) であるとされる。そしてさらに両者は基本的な品詞へと分けられてゆくわけであるが，かうしてとり出され分類された要素としての品詞に，それぞれ精神のエネルギーとの関連で普遍的な性格づけが与へられるわけであり，そこで普遍文法の理念的性格が明確となるわけである。そしてそれは例へば，知性の時間把握の形式が，そのまま動詞の時制の一般図式として表出されることの解明に於て，最も明瞭に見てとることができるのである (p. 100～139)。

品詞論の展開の最後に於てハリスは，このやうな分析は，知性が知性を対象として自己目的的に行なふ純粋な知的活動であり，これこそが神的生活にほかならないとしてゐる (p. 293～303)。

言語の本質 (nature)

"Hermes" の第Ⅲ部は，言語の質料と形相をめぐる本質論的な言説が展開する。その冒頭に於てハリスは，身体を媒介とした創作活動であれ，思考

の如き精神それ自体の活動であれ，すべての究極の原因は精神 (Mind) であるとしたうへで，その精神の識別能力によってこそ事物の深奥に達し，そこから，最も微細な部分にも統合されてゐる根源的な要因をとり出すことが可能なのであるとしてゐる。そしてそのやうな要因の中では，質料と形相が最も根本的なものであるとしたうへで，それを言語に適用しようとするわけである。このやうに敢えて古代の哲学者に倣ったことについて，ハリスはそれをそのまま近代哲学への批判としてゐる。つまり古代哲学が事物の始源を問題としてゐたのに対し，近代哲学は，結果として存在してゐるにすぎない具体的で手に触れうるもののみを，しかも数量的にあるいは化学実験による分析によってのみ扱ってゐるとするわけである (p. 305～308, p. 308 注(b))。

言語を質料と形相に分けるに当っては，共通性と特異性といふカテゴリーが導入される。すべてのものは，他の多くのものと共通する何かと，そのものをそのものたらしめてゐる特有の何かから成り立ってゐるのであり，このことを言語にあてはめるならば，言語は音であるといふ点で他の音と共通であるが，意味をもつことが正に言語特有のことであることが明らかになるわけである (p. 309～312)。この共通性と特異性といふことから，音は言語の質料とされ，意味は言語の形相とされる。さらにハリスは，動物のたてる音との比較で，今度は意味をもつといふ点を共通性として認めつつ，その意味の由来の相違からさらに人間の言語の特異性を際立たせてゐる。つまり動物の音の意味が自然に由来するのに対し，言語の意味は契約に由来するとするのである (p. 313～314)。かくして言語の形相は完全に自然から切り離され，人間精神の能力の形式（エネルギー）である理性と社会性に帰せられることになる。意味は，実体としていはば外から言語に与へられるのである。

記号体系としての言語

言語の質料を音としたうへで，ハリスはその音の性質を考察する。音の中でも言語をなす人間の声は，身体の機能によって差異化され，分節的に発音されるのを特徴とする。それには最小の要素があってそれが母音と子音に区別され，その結合が音節をなし，音節の結合が語をなし，語の結合が文をなし，文の結合が発話をなす (p. 316～326)。かくして言語の質料は有節音であることが確認されるが，やはりここでも音は，分節化された

実体として外から言語に与へられてゐるのである。

有節音に契約によって意味が付与されると語となるが，同じ契約の下に意味もつ多くの語が，全体としてある言語を構成する。語は，分節化され，契約によって意味をもった音声として定義され，言語は，そのやうな意味をもった音声のシステムとして定義される (p. 327～329)。

ここでハリスは，さらに言語が恣意的な記号 (symbol) であることを明らかにするわけであるが，それは次のやうな考察から導かれる。つまり，言語を，上記のやうな，意味をもった音声のシステムとみなした場合，それがこの世界のある種の画像と見えはしないかといふことを想定してみるのである。するとその場合には，個々の語が世界の個物の模像となってゐるやうな関係が考へられる。しかし，ハリスは，語を模像とする考へを退ける。もし語が模像であるならば，それはオリジナルである個物の自然的属性をもってゐなければならない筈であるが，語のいはば外面である分節音にはそのやうな自然的性質は見られない。従って語は，事物にとっては恣意的な付随物であり，つまりは記号であるといふことになるわけである。そしてまたさうであればこそ，ものの名前は各言語によって相違するといふやうなことがありながらも，すべてのものの表象に語を用いることができることになるわけである (p. 229～331)。

ではなぜ，日常のコミュニケイションに於て，自然的直観によってすぐにそれと見分けがつく模像よりも，習慣や制度によってのみ知られる記号の方が，手段として選択されるのであらうか。ハリスは，人の感覚に訴へて何かを伝達しようとする場合，模倣によることが，対象の自然的属性に制約されるが故に困難であり，場合によっては不可能であることを指摘する。それに対し記号は，その形成は全く容易であり，しかもあらゆる対象を象徴することができるわけである。つまり恣意的な記号であるからこそ，表現は限りない自由を得ることになるのである (p. 331～336)。この，模像との比較に於て言語を恣意的な記号とする発想は，分節化された事物の世界の存在を既に前提してゐるとはいへ，言語を，自然から切り離されたもの，従って精神が自由にその独自の形式を与へることができるものとして把へてゆく方向に道を開いてゐるといへる。それはまた，質料 (素材) 面に対して形相 (形式) 面を徹底して優越させ，それを精神のエネルギーへと帰着させるといふハリスの一貫した姿勢につながってゐるともいへるわけである。

しかしまたその一方で，ハリスは，いったん確立した音と意味の結びつきは自然的なものに見えてくることを指摘してゐる。例へば，fire と火，water と水の結びつきは，自然ではなく契約に基づくものであり，恣意的なものであるが，火を思はせるものに fiery，水を思はせるものに watry といふ派生語を使用するのは自然であり，それらを逆に使用することは不自然であると思われるであらう (p. 336)。このことは，語が関係をなし，システムとなってゆけば，それはそのシステム内部に於ては必然的なあり方をしてゐるやうに見えてくといふことを示唆してゐるわけである。そしてそれは自然にではなく，言語独自の形式に帰せられるべきことなのである。

語と観念

語が記号であるとするならば，それは何の記号であらうか。ハリスはまづ，語が外界の個物の記号であるかを考へて，それを否定する。語が，個物の記号であるとするなら，すべての語は固有名詞でなければならず，個物が無限に存在することから，語も無限に存在しなければならなくなるからである。そのやうな場合には，一般的な命題を形成することは不可能であり，科学も技術も成り立たないこととなる (p. 337～339)。

語が外界の個物の記号でないとするならば，それは何か私達の内部のもの，つまり観念の記号でなければならない。しかし観念といっても，個々の特殊な観念を想定すると個物の場合と同じ困難に出会ってしまふ。従って，語は一般観念の記号であるといふことになる。一般観念は，過去・現在未来にわたって存在する多くの個別の特殊な観念の中に，共通して存在する観念である。すると語は，やはり多くの個別観念に対して共通した存在となるわけであり，個々の観念がいかに数多くかつ移ろひやすいものであっても，言語は明確で安定したものとるなわけである。そしてこの一般観念を媒介とするが故に，言語は時空を超えた理解が可能となるわけであり，普遍的真理の表現も可能となって，科学や技術も成り立つわけである (p. 340～343)。

しかし，様々な個物とかかはる生活のレヴェルでは，語は個別観念を表現することができなければならない。その一つの方法は固有名詞を使ふことであるが，ハリスはこれを全く稚拙な方法であるとする。固有名詞は場所によって恣意的に適用されてをり，言語の知識といふこととは何の関係

もなく，言語の正当な部分をなすとは言ひ難いとするわけである。もう一つのより巧妙な方法は，限定詞を使ふことであるが，ハリスは，これによって，個物の無限性の中で迷ふことなく，どの個物をも指示 (denote) することができるとする。多少用語の混乱はあるが，ハリスは，一般名辞 (general term) に少数の限定詞を付与することで無限の個別観念 (infinite particulars) を表現 (express) することができ，その個別観念を通して個物を指示 (denote) することができると考へてゐるといへよう (p. 345～346)。

ハリスはまとめとして，語は，一次的本質的直接的には一般観念の記号であり，二次的偶然的間接的にのみ特殊個別観念の記号となるとしてゐる。しかし言語がこの二重の能力をもつといふことは，それが知性と感性の働きに対応した表現ができるといふことであり，つまりは認識といふ精神のエネルギーの全体を表出すべく形式を与へられてゐるといふことにほかならないわけである。

一般観念をめぐる考察

一般観念の形成と，その本質について考へるに当って，ハリスはまづ経験論哲学の批判から出発する。この哲学は，感覚によって把握されるものにしか実在性を認めず，従って感覚から知性へと上昇する代りに，無限の個物の中に迷ひ込んでゐる。そのため知性の領域の原理的探究はないがしろにされ，真理の基準は実験のみとなってしまってゐるわけである。この点で，実験に全く頼らずに，議論の余地のない確実性をもつ算術と幾何学が存在することに，ハリスは注目してゐる (p. 350～352)。

人間の最初の認識が感覚によるものであることは，ハリスもいったん認める。しかしそれは，対象の直接の存在を離れては持続することのできない一時的なものである。感覚の働きが終った後，事物の失はれゆく形相を保持するためには，想像力 (imagination) といふ能力が働かなければならない。この想像力は，その活動態 (energies) に於ては感覚に続くものであるやうに見えるが，実はその厳威と使用に於ては感覚に先立ってゐるのだとハリスは言ふ。感覚の働きが，対象物の現存といふことに拘束されるのに対し，想像力はその対象を容易に支配することができ，望む様に呼び出すことができるわけである (p. 353～356)。

この様に，想像力が感覚の流動性を固定したところに，精神のより高度

な諸力つまり理性と知性の力が，その形相を実現しつつ働く(エネルギー)ことができるわけである。想像力は，より高度なエネルギーを支へる基礎を提供してゐるわけであるが，この基礎が無ければ，緊張と弛緩を交互にくり返しつつ持続してゐる知性や理性は，単なる能力 (a mere capacity or power) としてとどまってゐるわけである。人間の精神は，その本性 (nature) から自然に発するこの理性と知性のエネルギーによって，多の中に一を，異なれるもののなかに同一のもの類似のものを見分けるのである。この認識は，感覚によるそれよりも包括的であり，そのそれぞれが，無限に多様な個物の中に於て，自らの本性の統一性と不変性を失ふことなく，一つの全体として存在してゐるものなのである。とにかくこのやうなプロセスで一般観念が形成されるわけであるが，個物はこの一般観念との関係でのみ知ることができるわけである。あらゆる言語の語は，この一般観念の記号なのであり，さればこそ異なった言語間の理解が可能となるのである(p.358～374)。

ハリスはさらにここから，その一般観念はもともとはどこから来たのかを問題とする。既に述べた一般観念形成のプロセスから，当然私達は外界の事物に関して，その感覚的・外部形相から知的・内部形相を把握してゆくといふ順序が考へられる。しかしハリスは，知的・内部形相の存在をすべてに先行させようとする。確かに人工物を考へれば，製作者は創ろうとするものの観念を内部形相としてあらかじめもってゐた筈であり，その内部形相は原型といふ形で外部形相に対応することになるわけである。しかしハリスは，自然物にに関しても，その人工物を超えた精妙さといふことから，そこに意図 (design) を想定する。そしていったん意図の存在を認めれば，そこから必然的に精神の存在が考へられることとなり，自己のもつ範型に従ってこの精妙なる自然を創り出してゐる超越的な精神（神：Deity）が立てられることになるわけである。かくてハリスに於ては，究極の知的・先行形相が超越的精神と共にあって，一般観念の起源はここに置かれることとなる (p. 374～402)。しかし，言語の問題に深くかかはってくるのは，観念の究極的起源に関する形而上学的考察よりは，観念の形成と言語の形成の関係をめぐる考察である筈なのである。

言語と精神

以上述べてきたハリスの言語についての考察を，一つの展望の下に置く

ためには，彼がすべてをそこに帰着させてゐると思はれる精神といふ観点から全体を把へ直してみることが有効な方法であると考へられる。

まづ，完全なる知的形相をもった超越的精神の存在が，すべてに先行する形で想定されてゐる。この世界は，この形相を原型として創造されたものの集合として考へられる。人間の精神は，あくまで感覚を出発点としつつも，想像力と知性のエネルギーによって，この世界から知的形相をとり出して一般観念を形成する。そしてこの一般観念に，契約によって，分節化された音声が結びつくと語となり，語が体系となって言語を形成することとなる。言語は正に理性と社会性の結合エネルギーとして形成されるわけであるが，この過程に於ては，知性が様々な個人的社会的要因によって不完全な働きしかしないことがあることを，ハリスは認めてゐる。人間が形成する観念は，従って，常に自然と真理といふ基準に照らして検証されてゆかねばならないのであるが，この重要な作業に於て，我々は，個人と同様，民族もまたその民族特有の観念をもち，その観念がその民族の守護精神 (genius) となってゐることに気づくことになるのである。最も賢い民族は，最も多くの最良の観念をもってゐるが故に，当然最も豊かな最高の言語をもつことになるとされる (p. 407～408)。そしてこの点に於て，ハリスはあらゆる言語の中で，ギリシャ語を最も高く評価するわけである。

とにかくハリスは，あくまで精神のエネルギーに言語のすべてを帰するために，観念(知性)を先行させ，それに音声を契約(社会性)によって結びつけるといふ形で言語を把握した。従って，語は観念の記号といふことになり，またその両者の関係には自然的な根拠は無いことになる。ただし，語が体系をなしてゐれば，その内部ではそれは必然的なものに見えるわけである。事物は，一般観念が限定されて二次的に個別観念が形成されることにより，それを通して個物として指示されることとなる。語の質料である音声には，事物の自然的属性は含まれず，従って語とその指示する個物との結びつきはやはり恣意的なものとなり，何らの自然的根拠はないわけである。しかしにもかかはらず，語が体系となって言語 (language) となれば，結果としてそれはこの世界の画像であるかのやうに思はれ，個々の語は個物の模像であるかのやうに意識され，恣意性は隠されるわけである。

このやうにハリスは，言語が恣意的な記号であること，そしてその恣意性は体系という言語独自の形式の力によって隠されて，言語が自然的根拠

をもつかのやうに見えてくることなど，クリティカルな問題によく気づいてゐたといへる。しかしハリスに於ては，言語・観念・事物は共に既に分節化され表象された実体であることが，当然の前提となってゐたといへる。従って，第Ⅲ部の言語の本質の考察に於ては，単独で意味をもつ語が無条件で中心に置かれることとなった。それ故にまた，体系といった場合もそれは，個々の確定した要素である語が連なるといふ意味での体系であり，当然のことながら体系自体の揺れ動きに根拠あるいは無根拠を見るといふ発想は出てきてゐない。

また語が中心に置かれたために，言語は所産と見做されることとなり，第Ⅰ部に於て明確にうち出されてゐた，文のレヴェルに於けるエネルギーの表出の問題が十分に展開されなかったといへる。言語の意味（形相）の真の担い手を，個々の語ではなく文とし，分節化された音声を思考の表現にまで高めるといふ文の機能に，精神のエネルギーの表出を見てゐたならば，エネルギー概念のもつ形式付与性といふことがもっと明確に出てきた筈だからである。そして最終章に於ける言語の多様性といふことにも，もっと積極的な意味を与へることができたであらう。また，言語と精神のエネルギーのもっと内的な関連，言語の認識への関与といふことも，過程論的な発想の下に考察の対象となったかもしれないのである。ハリスに於ては，精神の活動が言語と独立に置かれる形となり，そこで形成された観念が一方的に外から言語に与へられてゐるといふ感を逸れないのである。

このやうに，ハリスの言語哲学の根底にある実体論的発想からくる様々な限界を，その後の言語学の展開をみて批判することはたやすい。しかし，言語の基礎づけの試みは，結局，言語・観念・事物の三項のいづれかに根拠を置くことに帰着せざるを得ないともいへるのであり，ハリスは，事物を先行させる実在論に対し，観念を先行させて，さらにそれを精神のエネルギーによっ，根拠づけるといふことで，一つの極限的なモデルを提示したともいへるのである。

ソシュールは，言語をすべてに先行させ，観念も事物も言語の分節化の結果とする。さらに言語それ自体を，非実体的な差異の体系とすることで，あらゆる実体論的発想から自由であらうとしてゐる。しかしその差異の体系も一つの極に於て立てられた一般者といふ感を逸れないのであり，あの三項図式を逃れやうとするならば，言語の問題は結局一対一の場といふところから考へ直す以外にはないところに来てゐると思はれるのである。